



キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2012

第1回講座
講義資料

函館志海苔出土銭と中世貨幣史研究

田中 浩司 函館大学 教授

日時：平成24年6月9日（土）午後1:30～3:00

会場：ホテル法華クラブ函館

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

たなか ひろし

田中 浩司 氏 函館大学 教授

1963年（昭和38年）東京都生まれ。中央大学文学部卒業。中央大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。中央大学非常勤講師などを経て、1998年（平成10年）、函館大学専任講師。2011年より現職。

1995年度、能ヶ谷出土銭調査団顧問（東京都町田市）、1995～2000年度、国立歴史民俗博物館共同研究員、1998～2004年度、日本銀行金融研究所貨幣史研究会（東日本部会）会員。

専攻は日本中世経済史。室町・戦国時代の貨幣流通史や金融史。室町幕府、貴族・寺社の経済、それらの領主間の関係を、儀礼・宗教、経済的な視点からとらえる研究を進める。

主な論文に「貨幣流通からみた一六世紀の京都」（鈴木公雄編『貨幣の地域史』所収、岩波書店、2007年）、「十六世紀後期の京都大徳寺の帳簿史料からみた金・銀・米・銭の流通と機能」（『国立歴史博物館研究報告』第113集、2004年）、「儀礼からみた中世後期の領主経済の構造と消費」（『国立歴史博物館研究報告』第92集、2002年）などがある。

函館志海苔出土銭と中世貨幣史研究

函館大学商学部 教授 ^{たなかひろし} 田中浩司

I はじめに

- ・函館市所在の国宝・国指定重要文化財
- ・函館志海苔出土銭（市立函館博物館でのロビー展「志海苔古銭」。H24/4/3 撮影）
- ・貨幣史研究、志海苔出土銭、鈴木公雄先生との出会い……鈴木先生の研究の紹介

○函館市所在の国宝・国指定重要文化財

No.	指定種別	名 称	指定年月日	備 考
	国 宝	土 偶	平成19年6月8日	中空土偶。旧 南茅部町出土
1	重要文化財	木造大日如来坐像	昭和42年6月15日	函館市住吉町所在の高野寺所蔵
2	重要文化財	太刀川家住宅	昭和46年12月28日	函館市弁天町所在
3	重要文化財	旧函館区公会堂	昭和49年5月21日	函館市元町所在
4	重要文化財	函館ハリストス正教会復活聖堂	昭和58年6月2日	函館市元町所在
5	重要文化財	遺愛学院 旧宣教師館 本館	平成13年6月15日	函館市杉並町所在
6	重要文化財	北海道志海苔中世遺構出土品	平成15年5月29日	市立函館博物館所蔵。函館市青柳町所在
7	重要文化財	大谷派本願寺函館別院	平成19年12月4日	函館市元町所在

II 貨幣とは、おカネとは

II-1 貨幣とは、おカネとは

➤ 貨幣を機能という視点からみると

①交換の媒体・支払い手段 ②価値の尺度 ③価値の蓄蔵・保蔵

……経済学では、①～③の3つの機能を果たしている「モノ」を「貨幣」とよぶ……モノは何でもいい

- ・ これ以外の貨幣の機能としては……贈答（お祝い金、香典、お賽銭、六道銭など）

⇒以上の点から、現代のおカネ=貨幣

II-2 貨幣に何が使われてきたか

➤ 貨幣の形態・素材 モノは何でもよい……変化しにくいモノがベター

日本：紙、金属（銅、鉄、金、銀など）

海外：紙、金属、プラスチック

歴史的には：

貝殻（貝貨=バイカ）、石、絹、布（綿布・麻布）、米・稲、麦、紙、タバコ、金、銀、鉄、鉛などなど……●銭図の銭は、銅と錫や鉛の合金が多い

II-3 銭とは……●銭 図版参照

➤ 銭(貨)とは

「金、銀、銅などの金属でつくられた貨幣。多く、円形で中央に穴があるもの」

「江戸時代、銅・鉄でつくられた貨幣のこと」(小学館『精選版日本国語大辞典』2006年)

・中世の文献史料上の表記・異称

鳥目(ちょうもく)、鸞眼(ががん)、要脚・用脚、料足(りょうそく)、
用途(ようと・ようとう)、青銅(せいどう)など

・単位……基本的には「文」とその1000倍の「貫文」

文は、重さの文目=匁に由来。1枚=約3.75g(～4g)

1枚=1文 1疋(ひき)=10文、

1緡(さし・こん)=100文 1結・1貫文=1000文

□おカネではない銭(おもに江戸時代)……絵銭(えせん・えぜに)、

玩具の銭、神仏への奉納用の模型の銭……念仏銭、題目銭など

II-4 おカネはどうして通用するのか

- 物々交換→不便
 - 交換しないと生活できない→取引相手が受け取ってくれる(価値のある)モノ
 - 信用=取引相手が価値を認めて、後日でも必ず交換できる(受け取ってくれる)こと
 - 価値=2商品を交換する際の交換比率(『デジタル大辞泉』の「交換価値」の項など参照)……交換の仲立ちをする共通の尺度(=貨幣の機能)
- ⇒信用も価値も、取引(交換)相手との合意にはじまる
合意がなければ、貨幣は成立しない

II-5 信用と価値

- 貨幣の形態と発行者(信用を付与する主体)からみて
 - A.商品として別の使い道をもつモノ=商品貨幣 or 現物貨幣
発行者・信用付与者:誰でも発行可能 例:米、麦、絹、布、タバコ、などなど
 - B.金属などの地金の価値で通用するモノ=秤量(ひょうりょう)貨幣
誰でも発行可能。発行者が信用付与 例:金、銀、プラチナなど
 - C.貨幣以外の用途がほとんどないモノ=名目貨幣
国家などが発行し、信用付与 例:紙幣(モノとしての価値はほとんどない)

II-6 まとめ

- 貨幣とは:①交換の媒体・支払い手段、②価値の尺度、③価値の蓄蔵・保蔵、の3つの機能を果たすモノ
- 歴史的には、貝や石、金属、布、紙など、いろいろなモノ、素材を使用
- 貨幣の通用には、信用と価値の問題がある
- 貨幣の形態と発行者からみて
 - A.商品貨幣・現物貨幣 B.秤量(ひょうりょう)貨幣 C.名目貨幣 に分類される
- 銭(貨)=金属製で、だいたい円形で、中央付近に四角い穴があるもの

Ⅲ 日本貨幣史の概観—古代と中世を中心に

Ⅲ-1 日本の中世とは

◆ 時代区分

□ 古代： ～平安時代

□ 中世：中世成立期＝平安時代後期 10世紀～or 12世紀初頭～

中世前期＝鎌倉時代：12世紀末～1333年

中世後期＝

南北朝時代：1333年～1392年

室町時代の目安：始期1392年～15世紀

終期の諸説(a)1466年応仁の乱開始 (b)1493年北条早雲、堀越公方を破る など

戦国時代の目安：16世紀～1568年（信長、足利義昭を奉じて上洛）

始期の諸説(a)1466年、(b)1493年など

織豊時代の目安：1568年（信長、足利義昭を奉じて上洛）～1599年

□ 近世：江戸時代＝1600年（家康、関ヶ原合戦で勝利）～

※織豊時代は、「近世」とする説が有力ですが、今回は便宜上、1600年以降とした。

Ⅲ-2- (1) 日本貨幣史の大きな流れ・・・その1 古代

□ 7世紀後半 律令国家の成立（飛鳥時代）

• 米や絹などが貨幣として使われる・・・出挙米（すいこまい。種籾の貸付）

• 7世紀末 無文銀銭、富本銭などの金属貨幣が登場

• 708年 和同開珎（銀銭のちに銅銭）発行

□ 710年 平城京遷都＝奈良時代

• 760年 万年通宝（銅銭）、太平元宝（銀銭）、開基勝宝（金銭）を発行

• 765年 神功開宝（銅銭）を発行

□ 794年 平安京遷都＝平安時代

• これ以降、958年まで 9種類（計12種類）の銅銭を発行

・・・米、ついで絹が多く、銭での支払いもあり（〔中村修也 2006〕等参照）

△960年 宋建国（北宋＝960～1126年、南宋＝1127～1279年）

●皇朝十二銭の発行

➤ 皇朝十二銭＝律令国家が発行した和同開珎から乾元大宝までの十二種類の銅銭（＋銀銭・金銭を含める考えもある）

①708年 和同開珎（銀銭・銅銭）発行—皇朝十二銭の最初

②760年 **万年通宝**（銅銭）、太平元宝（銀銭）、開基勝宝（金銭）発行

公定交換レート 和同開珎1：万年通宝10、太平元宝100、開基勝宝1000

③765年 **神功開宝** ④796年 **隆平永宝**

⑤818年 富寿神宝 ⑥835年 **承和昌宝** ⑦848年 **長年大宝**

⑧859年 **饒益神宝**（にようえきしんぼう） ⑨870年 **貞観永宝**、

⑩890年 寛平大宝、⑪907年 延喜通宝

⑫958年 乾元大宝（けんげんたいほう）—皇朝十二銭の最後

→**太字**の銭は、旧銭に対して新銭を10倍の価値で通用させたもの。注記のないものは銅銭。
銭は、徐々に小型化、粗悪化（鉛の比率が増加）で信用を失う（〔瀧澤武雄 1996〕等参照）

III-2- (2) 日本貨幣史の大きな流れ・・・その2 中世(1)

- 空白の11世紀 銭での支払い事例が消滅
 - ・・・かわりに、米、絹などでの支払いがほとんどに
- 12世紀後半 平氏による宋銭輸入の活発化—朝廷で銭の普及を議論。朝廷は普及反対。
- 12世紀末 鎌倉幕府成立＝鎌倉時代
 - △1206年 元（中国）建国（1206～1388年）
- 1274・1282年 元寇
- 1323年ころ 元から日本への商船が約27tの銭（ほとんどが宋銭）を積載（新安（韓国）沈没商船）
- 1333年 鎌倉幕府滅亡＝南北朝時代
- 1334年 後醍醐天皇、乾坤通宝（銭貨・紙幣）の発行を計画（『建武記』）

III-2- (3) 日本貨幣史の大きな流れ・・・その3 中世(2)

- 1336年 室町幕府成立＝南北朝時代
- 13C後半～14C 銭の急速な普及
 - ……………各地で年貢を銭で納める事例（代銭納）が急増（〔佐々木銀弥 1972 など〕）
 - ……………1320年代、土地取引の支払手段の8割以上が銭に（〔松延康隆 1998〕 など）
 - ⇒銭1枚＝1文で安定した取引・・・「中世的な貨幣システム」の確立（〔中島圭一 1999〕）
 - どんな銭も1枚＝1文・・・大型銭も削って小型に統一
- △1368年 明建国（1368～1644年）
- 1392年 南北朝の合一＝室町時代
- 1401年～ 日明貿易が開始され、明銭（洪武通宝、永楽通宝、宣徳通宝など）が大量に輸入される
 - 大型銭の周囲を削り小型銭にした事例（図版参照：志海苔出土銭）

III-2- (4) 戦国時代＝15世紀後半～16世紀の貨幣流通

- 1467～1477年 応仁・文明の乱
- 1485年 守護大名大内氏が周防国（山口県）に撰銭令発令
- 1500年 室町幕府がはじめて撰銭令を出す
 - こののち16世紀 幕府、有力な寺社（奈良の興福寺）、
 - 戦国大名（浅井氏、北条氏、結城氏など）、織田信長などが撰銭令・貨幣法令を出す
 - ⇒銭1枚＝1文で安定的な取引＝「中世的貨幣システム」の動揺、崩壊へ

III-3 まとめ

- ◆ 12世紀後半 平氏による宋銭輸入の活発化
- 13世紀後半～14世紀 銭の急速な普及
 - 全国各地で年貢を銭で納める事例（代銭納）が急増
 - ……………銭1枚＝1文で安定的な取引 ⇒ 「中世的な貨幣システム」の確立

△13 世紀後半以降、「渡来銭」に依存した貨幣経済展開

- 1485 年 守護大名大内氏が周防国(山口県)に撰銭令発令
- 1500 年 室町幕府がはじめて撰銭令を出す

—明銭(永楽通宝など)の流通に配慮

⇒16 世紀、銭 1 枚=1 文で安定的な取引が困難に。「中世的貨幣システム」の動揺、崩壊へ

16 世紀の撰銭令・貨幣政策の具体的な内容は？

III-4 疑問点の整理

- 問1: 中世の日本列島ではどんな種類の銭が流通していたのか？
……永楽銭などの銭名が出てくる銭が使われていたことは確認できるが、名前が出てこない、
当たり前で通用していた大多数の銭は？ 皇朝十二銭か、宋銭か？
- 問2: 15 世紀後半以降、なぜ撰銭令や貨幣政策が活発化したのか？
→撰銭令や貨幣政策を読むことで考えてゆこう

IV 戦国時代の撰銭令・通貨政策

IV-1- (1) 文明 17 年(1485) の大内氏の撰銭令の基礎的な理解

- 撰銭令(えりぜにれい、せんせんれい): 撰銭とは、割れや欠けなど、状態の悪い銭を排除すること。撰銭令とは、粗悪銭の排除、質・種類による必要以上の銭の選択禁止(=良質銭のみの選択禁止)、各種銭貨・貨幣の通用価値の公定によって、貨幣取引のトラブルを解消し、商品流通を安定化させようとしたもの(小学館『日本歴史大事典』の「撰銭令」の項などを参照)。
- 時代背景(文明 17 年(1485)): 応仁・文明の乱後の下剋上の時代。幕府の権威が衰退。守護たちは独自の支配を強化した。
- 発令者の大内氏: 周防国(山口県)山口を本拠とした有力な守護大名。長門・石見・備後・筑前・豊前などの守護も兼任。山口は小京都。瑠璃光寺などの文化遺産も。博多の商人と結び、細川氏と日明貿易の主導権を争う。

IV-1- (2) 1485 年の大内氏の撰銭令

禁制
一 銭を選ぶ事、段銭の事は、往古の例たる上は、選ぶべき事もちろんたりといえども、地下仁宥免の儀として、百文に、永楽、宣徳の間、二十文宛て加えて、収納すべきなり。
一 利銭ならびに売買の銭の事、上下大小をいわず、永楽、宣徳においては、選ぶべからず。さかい銭と洪武銭(なわ切の事也)うちひらめ、これ三いろを選ぶべし。但し、かくの如く相定めらるるとて、永楽、宣徳ばかりを用うべからず。百文の内に、永楽・宣徳を三十文加えて、使うべし。
一 (省略)
右、事書のごとく、米の売り買いは銭を用うべし。若し此の制札前を背く輩(ともがら)あらば、権門、そのほか諸人の被官たりといふとも、重科に処せらるべき者也。
文明十七年四月十五日

※出典・佐藤進一ほか編『中世法制史料集 第三巻』(岩波書店)による。読みやすいように、読み下したり、現代仮名遣いに変更したり、適宜仮名を漢字に直したり、濁点、句読点をつけたりするなどの変更を加えた。

IV-1-(3) 大内氏の撰銭令の解説

第1条：段銭収納（田地への段別の税の納税）の際

(1) 銭を選ぶ（＝粗悪銭を排除する）のはもちろんだが、

(2) 100文あたり、(明銭の) 永楽銭・宣徳銭を20文混ぜて段銭を納入するように

第2条：利銭（利子付きの銭の貸借）・売買銭（モノの売買の取引の銭）では、誰でも、永楽・宣徳は選んで（排除して）はいけない。

(3) さかひ銭(堺銭?)・洪武銭(縄切り)・打平(うちひらめ)は選びなさい（排除しなさい）

(4) 永楽銭・宣徳銭ばかりを使うのではなく、100文に永楽銭・宣徳銭を30文混ぜて使うこと

IV-1-(4) 大内氏の撰銭令の解説…深読み(下線部)

第1条(1)段銭（田地への段別の税）の納入には粗悪銭は使うな……大内氏は自分の財政にとって不利だから（＝領国外との取引に使えないから）粗悪銭は受け取りたくない

(2) 100文に対して明銭の永楽銭・宣徳銭20文を混用せよ

……市中では人気がないようだが大内氏は受け取るから

第2条：利銭（利子付きの貸借）や売買の取引の銭では、誰でもあっても、永楽・宣徳は選んで（排除して）はいけない。

(3) さかひ銭・洪武銭・打平は排除せよ……これらは粗悪だから市中でも排除せよ（たぶん市中では低価値だが通用していたので）。

(4) 永楽銭・宣徳銭は、100文に30文を混ぜて使用せよ……市中では人気がないかもしれないが、大内氏は通用させたいから（大内氏は日明貿易で明銭は豊富に持っており、その流通が必要）。

IV-2 1509年(永正6)の室町幕府の撰銭令

第1条：京銭（きょうせん・きんせん）と打平（うちひらめ）は排除するが、そのほかの渡唐銭（明銭の永楽銭・洪武銭・宣徳銭と、われ銭）以下をとりあわせて100文に32文を取り渡せ（混ぜて使え）

第2条：「悪銭」売買の禁止。

第3条：「悪銭」だからといって、商売を拒否したり、価格をつり上げることの禁止。

※出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集 第2巻』（岩波書店）

IV-3 2つの撰銭令からいえること

- 大内氏や室町幕府は、さかひ銭、洪武銭(縄切り)、打平、京銭などを(おそらく粗悪銭だから)排除しようとした
- 市中の取引では、永楽・宣徳などの明銭が、1枚=1文で通用しなくなっていたが、大内氏・幕府は通用させようとした
- 多様な価値の銭が登場した
- ① これまでどおり、銭1枚=1文の価値で通用する銭(精銭)
- ② 大内氏や幕府が排除したい銭(=大内氏らにとっては無価値だが、市中ではおそらく低価値で通用か?)
- ③ 永楽・宣徳のように、市中で忌避され、混用でないと通用しない、①と②の間くらいの価値の銭

⇒全部の銭が1枚=1文という同価値ではない状況。
さかひ銭とは何か。永楽などの明銭の価値が低下

IV-4 後北条氏の貨幣政策

- 後北条氏=相模国（神奈川県）小田原を拠点。伊豆から関東一円を領国化した戦国大名。初代北条早雲から、氏綱、氏康、氏政、氏直と領国を拡大。1590年に秀吉により滅亡。

◆ 永禄元年(1558)5月

古銭はそのまま使い、大かけ、大ひびき、打平などの排除を命令
→撰銭令発令

◆ 永禄2・3年頃

精銭（1枚=1文の基準の銭）と、中銭など異なる価値の銭の交換レート規定

◆ 永禄12年(1569)永楽銭を精銭の3倍の価値で換算するレートを発令

◆ 天正5年(1577) 永楽銭を精銭の2倍の価値で換算するレートを発令

⇒東国でも多様な価値の銭の登場。永楽銭を高価値で通用させる政策へ

※典拠：佐藤進一ほか編『中世法制史料集第五巻』（岩波書店）480号、503号。

〔佐脇栄智 1976、第8章〕、『戦国遺文 後北条氏編 第3巻』（東京堂出版）1915号など。

IV-5 西と東・・・戦国時代の撰銭令・通貨政策からわかったこと

➤ 西と東の共通点：西でも東でも、粗悪銭、低価値銭が増加。

大名などの領主は、状態の悪い銭の排除、価値の違う銭の交換レートを定めて、銭貨流通の円滑化をめざす…………撰銭令などの貨幣法令を出す

→全国的な粗悪銭（無価値・低価値銭）の増加

➤ 西と東の相違点

西国では嫌われて、少し低価値の永楽銭などの明銭。

関東では、永楽銭は高価値の基準通貨へ。

→永楽銭の価値は、西と東でまったく違う！永楽銭は、高価値の東に移動したのでは？

IV-6 疑問点の整理

問1（未解決の疑問）：中世の日本列島ではどんな銭が流通していたのか？

問2：15世紀後半以降、なぜ撰銭令や貨幣政策が活発化したのか？

→A. 永楽銭とか、打平とか、1枚=1文では通用しない、多様な価値の銭が登場したため。

問3（新たな疑問1）：では低価値（または無価値）な粗悪銭である、さかひ銭とか、打平とかはどこからきて、どうしてこの時期に増えたのか？

問4（新たな疑問2）：永楽銭の価値が西と東で違い、関東で高価値で通用したという証拠はあるのか？

⇒文献史料ではほとんどわからない

IV-7 考古学と文献史学

- 文献史学…………文字史料によって歴史像を描く

史料批判を経て、年代、事実の確定が可能。データよりも厳密な文字の解読を重視。

中世史に関する数値データの蓄積は多くない

- 考古学……出土品、モノによって歴史像を描く
 相対年代に強いが、絶対年代の確定は難しい。
 出土品のデータ蓄積が豊富……データ・傾向分析得意
- 考古学と文献史学
 文献にみえるモノを、考古学で同定するのは困難
 文献史料の裏付けを、考古資料・データでとることは可能
 また逆もやってみる必要も価値もある
 →1980年以降、出土銭が急増！出土銭のデータ蓄積豊富。疑問を解くカギは出土銭にある！

V 大量出土銭からみえてくるもの

V-1 大量出土銭から考える 問1. 中世の日本列島ではどんな銭が流通していたのか？

V-1-a 函館志海苔出土銭の概要

- 発見時期：昭和43年（1968）7月発見
- 発見場所：恵山国道と志海苔川の交差点付近
- 発見契機：道路拡張工事にともなう不時発見
- 出土枚数：387,514枚（最新データ）
- 銭種：93種
- 容器：越前焼の大甕2と珠洲焼の大甕1
- 最新銭：洪武通宝（明銭。初鑄年＝1368年）
- 埋蔵推定年代：14世紀末ころと推定



（以上、『函館志海苔古銭』、〔田原良信 2004、中村和之・野村祐一 2012〕など参照）

●志海苔出土銭の出土地の地図と写真



図表 1 志海苔出土銭の銭種・枚数(出土枚数上位 10 種)

順位	銭貨名	発行国	初鑄年	出土枚数	備考
1	皇宋通宝	北宋	1038	48,679	
2	元豊通宝	北宋	1078	45,173	
3	熙寧元宝	北宋	1068	36,447	
4	元祐通宝	北宋	1086	35,242	
5	開元通宝	唐	621	31,920	
6	天聖元宝	北宋	1023	18,528	
7	紹聖元宝	北宋	1094	15,937	
8	政和通宝	北宋	1111	15,823	
9	聖宋元宝	北宋	1101	15,396	
10	祥符元宝	北宋	1008	9,772	
				272,917	小計
	洪武通宝	明	1368	13	最新銭
	四銖半兩	前漢	BC175	8	最古銭
	和同開珎～延喜通宝	日本	708～907	15	皇朝十二銭

※出典：[中村和之・野村祐一 2012] より田中が作成

V-1-b 志海苔出土銭の評価

- 最新銭(初鑄年=初めて鑄造された年が最も新しい銭)は洪武通宝で、出土枚数は少ない。
⇒埋められたのは、最新銭の洪武通宝の初鑄年からほど遠くない時期と推定
(14世紀末……後掲：第3期=南北朝後期)
- 宋銭が約9割以上を占める。皇朝十二銭はごく少ない
- 90種類以上の銭種が混在
⇒宋銭の多さ、鑄造年代が1500年間に及ぶ多種類の銭の混在をどうみる？
当時の銭貨流通の実態か否か？
- ◆ 昭和43年(1968)当時、比較できる学術的なデータが僅少。
これを中世の日本列島での銭貨流通の実態と判断は難しい

V-1-(1) 大量出土銭の研究

→本講演では、鈴木公雄『出土銭貨の研究』([鈴木 1999])の数字に依拠

- 大量出土銭とは：1地点で1,000枚以上の出土事例
- 大量出土銭の事例(1998年3月時点)：
全国で275例、銭貨量は約353万枚→1事例平均で約1万3,000枚
- 発見時の特徴=不時発見(まったく予期しない地点での発見)
- 大量出土銭の国内最大のもの=「函館志海苔出土銭」
- 意義：多くの銭種が含まれており、当時の貨幣流通の復原に有効な材料

V-1-(2) なぜ埋められたのか(埋まったのか)

- ◆ 大量出土銭の場合(代表的な説)
 - 備蓄銭説：一時的備蓄、危機回避のために埋めた。あとで掘り起こす予定がそのままに。経済的なモノ
 - 埋納銭説：六道銭などのように、鎮魂や土地の神仏への寄進などの呪術的な意味で埋められ

たモノ

Q. なぜこんな論争がおきたか？

A. 理由を記した文献史料はきわめて少なく、わからなかった

□ 現在、大量出土銭の事例のほとんどは「備蓄銭」と考えられている [桜井英治 2002a]

・・・志海苔出土銭も呪術的な埋納銭の可能性は否定できないが、経済的な意味での備蓄、埋蔵銭の可能性が高い……………当時の活発な経済活動の証拠では

⇒大量出土銭は当時の銭貨流通の実態そのもの

V-1-(3) 大量出土銭を読み解く

◆ 鈴木公雄『出土銭貨の研究』(〔鈴木 1999〕) などによると

いつ埋められたか？=最新銭を基準とする

最新銭とは=含まれる銭の中で、発行国での初鋳年（はじめて鋳造された年）がいちばん新しい銭のこと

→初鋳年以降に埋められたことは確実

最新銭が少ない=初鋳年から日が浅い 多い=初鋳年からかなり時間が経過

V-1-(4) 図表2 大量出土銭の時期区分

埋められた時期区分		
第1期	13世紀後半	(鎌倉中期)
第2期	13世紀末～14世紀前半	(鎌倉後期)
第3期	14世紀後半	(南北朝期)
第4期	15世紀前半	(室町前期)
第5期	15世紀後半	(室町後期)
第6期	16世紀前半	(戦国前期)
第7期	16世紀後半	(戦国後期)
第8期	16世紀後半	(織豊期)

➤ 志海苔出土銭は14世紀後半=第3期に分類

V-1 図表3 大量出土銭の時期・地域別の状況(事例数)

地域\時期別	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	地域別事例合計
北海道・東北	6	8	3	7		4	1	1	30
関東	5	6	2	7	3	24	12	5	64
中部	3	13	5	5	3	16	5	3	53
近畿	5	5	2	3		11	1	3	30
中国	3	3		2	1	3			12
四国	1	6				1	1		9
九州	2	1		1	4	5	3	3	19
時期別出土事例合計	25	42	12	25	11	64	23	15	217

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』73ページの表6を一部改変

- 時期別:第6期(16世紀前半)が64例で最多。第2位が第2期(鎌倉後期)の42例。
第1期(13世紀後半=鎌倉中期)と第4期(15世紀前半=室町前期)25例で3位。
- 地域別:関東(64例)で第1位。第2位が中部(53例)、北海道・東北と近畿が30例で第3位。

V-1 図表 4 大量出土銭の地域・時期別の出土総枚数一覧

地域\時期	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	地域別出土枚数合計
北海道・東北	30,740	57,353	377,577	53,144		14,225	1,027	8,182	542,248
関東	45,415	62,364	121,737	149,879	294,534	246,164	71,873	32,090	1,024,056
中部	22,301	73,629	132,520	71,219	280,326	200,751	34,434	116,151	931,331
近畿	25,335	99,930	13,861	211,964		69,559	14,672	26,090	461,411
中国	32,155	15,616		17,568	12,141	28,956			106,436
四国	4,081	103,705				3,541	26,338		137,665
九州	18,050	13,688		14,589	128,418	58,325	27,004	31,850	291,924
時期別出土枚数合計	178,077	426,285	645,695	518,363	715,419	621,521	175,348	214,363	3,495,071

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』73ページの表6を一部改変

- 時期別：第3期(14世紀後半＝南北朝期)から第6期(16世紀前半)まで、50万枚以上を維持して高水準。
- 地域別：第1位が関東、第2位が中部、第3位が北海道・東北、第4位が近畿。

V-1 図表 5 大量出土銭の地域・時期別の1件あたりの平均出土枚数

地域\期別	第1期平均	第2期平均	第3期平均	第4期平均	第5期平均	第6期平均	第7期平均	第8期平均	地域別平均
北海道・東北	5,123	7,169	125,859	7,592		3,556	1,027	8,182	18,075
関東	9,083	10,394	60,869	21,411	98,178	10,257	5,989	6,418	16,001
中部	20,030	5,664	26,504	14,244	93,442	12,547	6,887	38,717	17,572
近畿	14,953	19,986	6,931	70,655		6,324	14,672	8,697	15,380
中国	29,813	5,205		8,784	12,141	9,652			8,870
四国	104,115	17,284				3,541	26,338		15,296
九州	59,395	13,688		14,589	32,105	11,665	9,001	10,617	15,364
期別平均	20,934	10,150	53,808	20,735	65,038	9,711	7,624	14,291	16,106

※出典：上記の図表3・4の数値より田中が算出

- 時期別：第5期(15世紀後半＝室町後期。第1位)と第3期(14世紀後半＝南北朝期。第2位)が多く、16世紀(第6期)以降は減少傾向。
- 地域別：中国を除き、北海道・東北から九州まで地域別の1件あたりの平均は15,000～18,000枚程度。

V-1-(5) 数値の観察から

- 地域分布：大量出土銭は、だいたい北海道から九州まで全国的に存在
 - 事例数：第6期(16世紀前半)が64件で最多。ただし枚数はそれに応じて増えていないので、1件あたりの枚数の減少を示す。
全期間で、一定の事例数があるのは関東と中部地方
 - 出土枚数：第3期(14世紀後半＝南北朝期)から第6期(16世紀前半)まで、50万枚以上を維持して高水準。
地域別では、中部と関東地方が全期間を通じて多い傾向。
- 地域別、事例数、枚数など、明確な相関関係は読みとれない

V-1 図表6 国別出土銭種構成比

% (銭種別の の百分比)	銭種数	銭種	枚数	% (出土枚 数の百分 比)
25.00%	40	北宋銭	2,716,609 枚	76.98%
4.38%	7	明 銭	306,272 枚	8.68%
1.88%	3	唐 銭	267,867 枚	7.59%
14.38%	23	南宋銭	67,948 枚	1.93%
1.25%	2	金(国名)銭	6,164 枚	0.17%
0.63%	1	李朝鮮	3,993 枚	0.11%
1.25%	2	元 銭	1,170 枚	0.03%
6.88%	11	安南銭	192 枚	0.01%
1.88%	3	琉球銭	210 枚	0.01%
5.63%	9	皇朝十二銭	83 枚	0.00%
0.63%	1	無文銭	3,880 枚	0.11%
36.25%	58	その他	6,389 枚	0.18%
0.00%	0	不 明	1,482,433 枚	4.20%
100.00%	160	合 計	3,529,020 枚	100.00%

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』32 ページより引用

→北宋銭が圧倒的に多い。つぎに、明銭と唐銭

V-1-(6) 中世日本列島の銭貨流通の実態

問1. 中世の日本列島ではどんな銭が流通していたのか？

⇒15世紀以降の明銭の流入で比率は低下するが、全国的にみて、中世の日本列島に流通していた銭の大多数が宋銭。次いで、唐銭（とくに開元通宝）と明銭が多い。

それ以外の皇朝銭などは、1割以下。

これらが1枚=1文の同価値で混用されていた=中世的な銭貨流通

V-1-a 志海苔出土銭を振り返る

- 志海苔・・・明銭は洪武通宝が数枚

→埋められたのは最新銭（明銭）の洪武通宝の初鑄年からほど遠くない時期

=第3期（14世紀後半）

- 志海苔・・・宋銭が約9割以上を占める→ほかの資料と比べてもごく普通

- 志海苔・・・90種類以上の銭種が混在

→これほど多くはないが、ほかでも40～50種程度の銭種が混在が一般的

（〔永井久美男 1994〕など参照）

V 大量出土銭から考える

問4. 永楽通宝の価値が西と東で違い、関東で高価値で通用したことは実証できるのか？

※明銭に関する参考データ：

永楽通宝：1408年初鑄

洪武通寶：1368年初鑄

宣徳通宝：1433年初鑄

V-2 図表7 永楽通宝を含む大量出土銭の地域・時期別出土銭貨総枚数

地域別	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	全期合計
北海道・東北	53,144	0	14,225	1,027	8,182	76,578
関東	149,879	294,534	246,164	71,873	32,090	794,540
中部	71,219	280,326	200,751	34,434	116,151	702,881
近畿	211,964		69,559	14,672	26,090	322,285
中国・四国	17,568	12,141	32,497	26,338		88,544
九州	14,589	128,418	58,325	27,004	31,850	260,186
合計	518,363	715,419	621,521	175,348	214,363	2,245,014

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』90ページ、表9-2より引用

V-2 図表8 永楽通宝の地域別・時期別の出土枚数

地域	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	全期合計
北海道・東北	4,308	0	727	189	64	5,288
関東	7,388	6,210	30,945	15,824	11,936	72,303
中部	3,010	25,339	23,280	4,016	12,043	67,688
近畿	1,125		12,907	1,047	2,328	17,407
中国・四国	1,914	1,527	3,892	3,225	0	10,558
九州	275	14,498	9,295	3,101	8,825	35,994
合計	18,020	47,574	81,046	27,402	35,196	209,238

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』91ページ、表9-3より引用

V-2-(1) 論点の整理

➤ 出土枚数の傾向は

第5期（15世紀後半）がピーク

第6期（16世紀前半）以降、減少傾向、第7・8期（16世紀後半）以降、急減

➤ 永楽通宝の出土枚数は

第5期～第6期、トップが中部から関東に移動。第7・8期では、近畿の少なさが目立つ

- では、それぞれの事例で、永楽通宝が含まれる比率（出現率）ではどうか？

V-2 図表8 永楽通宝を含む大量出土銭における永楽通宝の出現率

地域	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	全期平均
北海道・東北	8.11	0	5.11	18.4	0.78	6.91
関東	4.93	2.11	12.57	22.02	37.2	9.1
中部	4.23	9.04	11.6	11.66	10.37	9.63
近畿	0.53	0	18.56	7.14	8.92	5.4
中国・四国	10.89	12.58	11.98	12.24	0	11.92
九州	1.88	11.29	15.94	11.48	27.71	13.83
平均	3.48	6.65	13.04	15.63	16.42	9.32

※出典：鈴木公雄『出土銭貨の研究』91ページ、表9-4より引用

V-2-(2) 永楽通宝の価値の東西での違い

問4. 永楽通宝の価値が東と西で違い、関東で高価値で通用したという証拠はあるのか？

⇒16世紀後半（第7・8期）に、関東地方で永楽通宝の出現率が急上昇する

……他の地方に比べ、関東地方では永楽通宝が流通し、財産として備蓄された証拠

=関東地方で永楽銭の価値は高かった

V 大量出土銭から考える

問2. 排除対象とされた低価値（無価値）の粗悪銭である、さかひ銭や打平とかはどこからきたのか。どうしてこの時期に増えたのか？

V-3-(1) ニセ銭・粗悪銭の増加の理由・・・その1

- 経年劣化によって、よい状態の宋銭が減少した
- 多少粗悪な中国製の模鑄銭が輸入時に混入。

16世紀後半以降、中国南部からの銭輸入の減少。中国製の模鑄銭（粗悪銭）の輸入増加〔黒田明伸 2003〕

- 日本国内で応永年間（15世紀初頭）に永楽通宝を偽造したという江戸時代の証言（「鳴海平蔵由緒書」）

→西国で永楽通宝が忌避されたのは、偽造の粗悪なものだったからという説も

V-3-(2) ニセ銭・粗悪銭の増加の理由・・・その2

- ニセ銭づくり
 - 模鑄銭の鑄型の発見
京都（13世紀後半）、鎌倉（15世紀初頭の地層）博多（15世紀後半か）、堺（16世紀後半）
 - 共通点
多くは宋銭の鑄型。中には無文銭も。堺では鑄型がとくに大量に出土。
16世紀後半、堺でニセ銭が造られていたのは確実
・・・これが「さかひ銭」？〔嶋谷和彦 1998 など〕

VI おわりに

VI-1 論点の整理

1) 中世日本列島に流通していた銭の大多数が宋銭。

次いで、開元通宝（唐銭）と明銭が多い。

それ以外の皇朝銭などは1割以下。銭種は30種類以上が普通。

これらが1枚=1文の同価値で混用されていた=中世的な銭貨流通

⇒志海苔出土銭は、こうした中世、14世紀後半期の日本列島の銭貨流通の実態を示す、国内最大の出土銭である

2) 永楽通宝

15世紀後半以降、永楽通宝など明銭が西国で忌避され価値低下。

16世紀後半、関東の後北条氏が基準通貨とし、高価値で通用

この状態は、鈴木公雄氏らの出土銭の研究により裏付けられた

3) 粗悪銭はどこからきたのか

ニセ銭づくりが堺などでかなり盛ん。多様な粗悪銭が各地で流通

VI-2 戦国時代におこった貨幣流通の変化

①撰銭令にみられるような渡来銭を中心とした銭貨流通の動揺・崩壊

②それにともなう米の貨幣としての復権(〔浦長瀬隆 2001〕 など)

③貨幣としての金・銀の普及(〔小葉田淳 1968、田中浩司 2003・2004〕 など)

→②・③の諸点については、お話しできなかった

VI-3 その他の変化の概要

- 1530年代までに、金は、京都で価値蓄蔵手段として普及し始める(〔田中浩司 2003〕 など)
- 1560年代末～1570年代前半、京都では、金・銀が貨幣として本格的に普及し始める
(〔田中浩司 2004〕 など)
- 1572年ころに、京都では、土地取引の支払手段が銭から米に変化する。
(〔浦長瀬隆 2001〕 など)

VI-4 課題

- 撰銭令にみえる銭の価値のランク付け、銭貨の信用低下は、当時の経済にどのような変化をもたらしたか。まだ研究が不十分
例：銭の価値低下・・・物価上昇、銭の使用の限定化など(〔田中浩司 2007〕 など)
- 大量の渡来銭、宋銭、明銭などは、豊臣政権で、そして、寛永通宝発行までの江戸幕府で、どのように整理されたのか

● 参考文献一覧

- 池 享編 2001 『貨幣—前近代日本の貨幣と国家—』 青木書店
- 石見銀山歴史文献調査団編 2003 『石見銀山年表・編年史料綱目篇』 『石見銀山 研究論文篇』 思文閣出版
- 浦長瀬隆 2001 『中近世日本貨幣流通史』 勁草書房
- 川戸貴史 2008 『戦国期の貨幣と経済』 吉川弘文館
- 黒田明伸 2003 『貨幣システムの世界史』 岩波書店
- 小葉田淳 1958 『日本の貨幣』 至文堂
- 小葉田淳 1968 『日本貨幣流通史』 刀江書院
- 桜井英治 2002a 「備蓄銭に関する二つの史料」(『出土銭貨』17号)
- 桜井英治・中西聡編著 2002b 『新日本史体系 12 流通経済史』 山川出版社
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』 慶應義塾大学出版会
- 佐々木銀弥 1972 『中世商品流通史の研究』 法政大学出版局
- 佐脇栄智 1976 『後北条氏の基礎研究』 吉川弘文館
- 嶋谷和彦 1998 「中世・堺で生産された銭」(田中琢ほか編『古代史の論点3 都市と工業と流通』所収、小学館)
- 市立函館博物館『函館志海苔古銭』 1973 市立函館博物館友の会
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
- 鈴木公雄 2002 『銭の考古学』 吉川弘文館
- 鈴木公雄編 2007 『貨幣の地域史』 岩波書店
- 高木久史 2010 『日本中世貨幣史論』 校倉書房
- 瀧澤武雄 1996 『日本の貨幣の歴史』 吉川弘文館

- 瀧澤武雄・西脇 康編 1999 『〈日本史小百科〉貨幣』 東京堂出版
- 田中浩司 2003 「十六世紀前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通と機能」
(峰岸純夫編『日本中世史の再発見』所収、吉川弘文館)
- 田中浩司 2004 「十六世紀後期の京都大徳寺の帳簿史料からみた金・銀・米・銭の流通と機能」(『国立歴史博物館研究報告』113集)
- 田中浩司 2007 「貨幣流通からみた十六世紀の京都」(〔鈴木公雄 2007〕所収)
- 田原良信 2003 「志海苔中世遺構出土銭の再検討」『出土銭貨』19号
- 田原良信 2004 「再考 志海苔古銭と志苔館」『(市立函館博物館) 研究紀要』14号
- 東野治之 1997 『貨幣の日本史』 朝日新聞社
- 中島圭一 1992 「西と東の永楽銭」(石井進編『中世の村と流通』所収、吉川弘文館)
- 中島圭一 1999 「日本の中世貨幣と国家」(〔歴史学研究会編 1999〕所収)
- 中村和之・野村祐一 2012 「南北海道古銭とベトナム銭「開泰元寶」の発見
—志海苔古銭と涌元古銭—」『月刊 考古学ジャーナル』626号
- 中村修也 2006 『日本古代商業史の研究』(思文閣出版)
- 永井久美男編著 1994 『中世の出土銭』 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編著 1996 『中世の出土銭 補遺 I』(同上)
- 永原慶二 1997 『戦国期の政治経済構造』(岩波書店)
第II部第二論文「伊勢商人と永楽銭基準通貨圏」
- 日本銀行調査局編 1972 『図説 日本の貨幣1 原始・古代・中世』
(土屋喬雄・山口和雄監修。東洋経済新報社)
- 本多博之 2006 『戦国織豊期の貨幣と石高制』(吉川弘文館)
- 松延康隆 1998 「銭と貨幣の観念」『列島の文化史』6号(日本エディタースクール出版部)
- 峰岸純夫 2001 『中世 災害・戦乱の社会史』吉川弘文館
- 歴史学研究会編 1999 『シリーズ歴史学の現在1 越境する貨幣』 青木書店

図表 1-2 志海苔出土銭の銭種・枚数(全種類・出土枚数順)

No.	銭種名	初鑄年	発行国王朝名等	志海苔出土銭枚数								
1	皇宋通寶	1038	北宋	48,679 枚	49	大宋元寶	1225	南宋		85 枚		
2	元豐通寶	1078	北宋	45,173 枚	50	乾德元寶	919	前蜀		78 枚		
3	熙寧元寶	1068	北宋	36,447 枚	51	端平元寶	1234	南宋		49 枚		
4	元祐通寶	1086	北宋	35,242 枚	52	五 銖	前118	前漢		41 枚		
5	開元通寶	621	北宋	31,920 枚	53	大定通寶	1178	金(中国)		28 枚		
6	天聖元寶	1023	唐	18,528 枚	54	熙寧重寶	1071	北宋		27 枚		
7	紹聖元寶	1094	北宋	15,937 枚	56	開慶通寶	1259	南宋		23 枚		
8	政和通寶	1111	北宋	15,823 枚	55	天漢元寶	917	前蜀		23 枚		
9	聖宋元寶	1101	北宋	15,396 枚	58	天福鎮寶	984	前黎(ベトナム)		21 枚		
10	祥符元寶	1008	北宋	9,772 枚	57	咸康元寶	925	前蜀		21 枚		
11	嘉祐通寶	1056	北宋	9,173 枚	59	漢通元寶	948	後漢		20 枚		
12	景德元寶	1004	北宋	8,434 枚	60	海東通寶	1097	高麗(朝鮮)		19 枚		
13	天禧通寶	1017	北宋	8,258 枚	62	紹興通寶	1131	南宋		16 枚		
14	治平元寶	1064	北宋	7,257 枚	61	光天元寶	918	前蜀		16 枚		
15	咸平元寶	998	北宋	6,591 枚	62	洪武通寶	1368	明		13 枚		
16	至道元寶	995	北宋	6,138 枚	64	四銖半兩	前175	前漢		8 枚		
17	元符通寶	1098	北宋	6,004 枚	65	通正元寶	916	前蜀		7 枚		
18	景祐元寶	1034	北宋	5,811 枚	66	東國通寶	1097	高麗(朝鮮)		6 枚		
19	祥符通寶	1008	北宋	5,593 枚	68	崇寧通寶	1102	北宋		5 枚		
20	至和元寶	1054	北宋	4,630 枚	67	貨 泉	14	新		5 枚		
21	嘉祐元寶	1056	北宋	4,608 枚	71	大康通寶	1075	遼		4 枚		
22	大觀通寶	1107	北宋	4,410 枚	69	神功開寶	765	北宋		4 枚		
23	太平通寶	976	北宋	3,694 枚	70	富壽神寶	818	日本		4 枚		
24	淳化元寶	990	北宋	3,379 枚	73	紹聖通寶	1094	北宋		3 枚		
25	淳熙元寶	1174	南宋	2,462 枚	74	天盛元寶	1158	西夏		3 枚		
26	明道元寶	1032	北宋	1,942 枚	72	大平興寶	970	丁(ベトナム)		3 枚		
27	嘉定通寶	1208	南宋	1,783 枚	75	至正通寶	1350	元		3 枚		
28	至和通寶	1054	北宋	1,523 枚	78	清寧通寶	1055	遼		2 枚		
29	乾元重寶	758	北宋	1,501 枚	79	咸雍通寶	1065	遼		2 枚		
30	宣和通寶	1119	北宋	1,454 枚	77	大唐通寶	960	南唐		2 枚		
31	宋通元寶	960	北宋	1,348 枚	82	崇寧重寶	1103	北宋		2 枚		
32	治平通寶	1064	北宋	1,241 枚	76	隆平永寶	796	日本		2 枚		
33	慶元通寶	1195	南宋	980 枚	83	乾道元寶	1165	南宋		2 枚		
34	紹熙元寶	1190	南宋	813 枚	80	東國重寶	1097	高麗(朝鮮)		2 枚		
35	咸淳元寶	1265	南宋	631 枚	81	三韓重寶	1097	高麗(朝鮮)		2 枚		
36	紹定通寶	1228	南宋	630 枚	89	慶曆重寶	1045	北宋		1 枚		
37	嘉泰通寶	1201	南宋	573 枚	92	宣和元寶	1119	北宋		1 枚		
38	淳祐元寶	1241	南宋	533 枚	84	和同開珎	708	日本		1 枚		
39	正隆元寶	1157	金(中国)	495 枚	85	萬年通寶	760	日本		1 枚		
40	景定元寶	1260	南宋	482 枚	86	承和昌寶	835	日本		1 枚		
41	唐國通寶	959	南唐	408 枚	87	貞觀永寶	870	日本		1 枚		
42	開禧通寶	1205	南宋	388 枚	88	延喜通寶	907	日本		1 枚		
43	皇宋元寶	1253	南宋	309 枚	93	隆興元寶	1163	南宋		1 枚		
44	嘉熙通寶	1237	南宋	167 枚	90	海東重寶	1097	高麗(朝鮮)		1 枚		
45	紹興元寶	1131	南宋	159 枚	91	三韓通寶	1097	高麗(朝鮮)		1 枚		
46	至大通寶	1310	元	114 枚	—	銭名不詳	—			9,928 枚		
47	建炎通寶	1127	南宋	98 枚		合計				387,514 枚		
48	周通元寶	955	後周	94 枚								

注1) [中村和之・野村祐一 2012]のデータを田中が改変。
 注2)改変にあたり、永井久美男『日本出土銭総覧』(兵庫埋蔵銭調査会、1996年)などを参照した。

【謝辞】

函館志海苔出土銭の撮影、掲載などにつきましては、市立函館博物館の皆さんにたいへんお世話になりました。

文献・データの一部につきましては、函館高等工業専門学校の中村和之先生に御教示をいただきました。記して謝意を表します。